

教育界のグローバル化とレクチャーの 英語力の養成を目指す教授媒介としての英語研究

Globalization and lecturer's English education

井上 美沙子^{1,2}, 守田 美子¹, 池頭 純子¹, 広瀬 友久¹, Gordon Liversidge¹,
Oliver Bigland², 榮 光子, 中川 マリコ²
¹大妻女子大学, ²大妻中学高等学校

Misako Inoue^{1,2}, Yoshiko Morita¹, Atsuko Ikegashira¹, Tomohisa Hirose¹, Gordon Liversidge¹,
Oliver Bigland², Mitsuko Sakae, and Mariko Nakagawa²
¹Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357
²Otsuma Junior & Senior high School
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：グローバル化，英語，教授媒介

Key words : Globalization, English, Medium of instruction

抄録

本プロジェクトでは、社会に求められるグローバル人材を養成するための英語教授法として、英国オックスフォード大学で開発された English as the Medium of Instruction (EMI) の導入の可能性を模索した。具体的には、オックスフォード大学で行われた教員研修プログラムに、大妻中学・高等学校の英語教員を派遣し、教授法を習得する試みとともに、EMI の提唱者の一人である、ジュリー・ディアデン氏を招聘し、大妻中学・高等学校の教員で、英語に限らず EMI に関心のある教員および大学の教員に対しての講習を実施し、今後の EMI プログラムの日本での導入の可能性を探った。

EMI の導入については、複数の教員による総合的な取り組みが必要と考えられ、今後日本の教育事情に合った EMI の導入については、さらに継続的に研究が必要であることが明らかとなった。

1. はじめに

「グローバル社会」といった語が時代のキーワードとなって久しい。そしてグローバル化が急速に進む中、日本の教育機関においても、いわゆるグローバル人材の育成に対応するようなカリキュラム編成が求められている。英語教育についても、その到達目標は、単なる英語のスキル取得ではなく、英語を使って多国籍の多様な人々と良好な人間関係を構築しながら仕事を進めていくことであると考えられるようになった。

2013年12月に文部科学省が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、中学及び高校の授業は英語で実施するのが基本であり、特に高校においては英語による発表や討論、交渉といった高度な言語活動も行うことが指針して掲げられている。

本プロジェクトでは、このような時代の流れを鑑み、本学付属中学・高校学校及び大学の特に英

語を担当とする教員に、英語教授法の研修機会を提供し、本学における英語教育の改革に貢献することを試みた。

具体的には、英国オックスフォード大学で開発されたプログラム English as the Medium of Instruction (英語を媒介とした教授法、以下 EMI) の研修コースに、希望する本学の教員を派遣し、本学でも EMI の集中コースを開催した。以下はその報告である。

2. EMI について

EMI とは、2014年4月よりオックスフォード大学教育学部が開発したプログラムで、以下のよう

The use of the English language to teach academic subjects in countries or jurisdictions where the first language (L1) of the majority of

the population is not English

Dearden (2015:4)^[1]

つまり、母国語が英語でない人が大多数を占める国で、教科科目を英語で教えるための英語教授法である。

EMIのように語学科目以外の教科を外国語で行う学習法としては、古くはカナダなどのイマージョン教育がよく知られている。たとえば小学校などで算数などを外国語で教わることで、自然にリスニング能力を養成する教育方法である。

イマージョン教育は、インプット重視の教授法である。学習者は教師から外国語で授業を受けることで、目標言語のインプットを大量に受容し、その結果、聴き取り能力等を向上させることができる。

外国語で教科の授業を行う教授法ではあるが、インプットだけでなく、アウトプットも重視するインプット・インターアクションモデルとしては、ヨーロッパで多く採用されている Content and Language Integrated Learning(内容言語統合型学習、以下 CLIL)や、Content Based Instruction(内容中心教授法、以下 CBI)がある。

CLILとCBIの違いは、前者は外国語の習得よりもむしろ教えられる教科内容の理解に重点が置かれ、後者は教科を外国語で学ぶことでその外国語を習得することに重点が置かれている。EMIは立場的にはCBIに近いと考えられるが、授業手段として使用される外国語が「英語」に指定されている点が特徴的である。

英語で授業を行うことに対して否定的な議論がないということはない。特に英語以外の教科内容を英語で教えることにより、学習レベルが低下したり、学習者の意欲低下や英語嫌いを招くといった意見や、英語崇拜主義であるといった批判もある^{[2],[3]}。

今井(2010)^[4]は、同じ事象を眺めていても、母国語が何であるかによってその認識の仕方にさまざまなずれが生じることを実証する心理学の実験を紹介している。そして外国語を学ぶメリットというのは、母国語とは異なる認識の違いを意識して理解することだと述べている。

言いかえるなら、外国語学習は、母国語から見るデフォルトの視点とは異なる視点で世界を眺めることを可能にする。そして複数の視点で物事を捉えることができる人材こそが、多文化共生社会で、異文化を受容しつつ、自らの意見も発信して生き抜いていくことができる「グローバル人材」ではないだろうか。同じ教科も外国語で学ぶ

ことで、違った視野が開ける可能性がある。従って、本プロジェクトでは、義務教育段階から授業科目として取り入れられている英語で、部分的にでも、他の授業科目を学習することは意義があると考え、次節に述べるEMIの研修を企画し、実施した。

3. 報告

本プロジェクトは、2014年度に2つの企画を実施した。

ひとつは大妻中学・高等学校の教員を英国オックスフォード大学で実施されるEMIの教員研修プログラムに派遣したことである。日程、内容は以下の通りである。

- (1) オックスフォード大学EMI研修プログラム
 - 2014年8月3日～8月16日
 - 午前 教科教授法2コマ
 - 午後 語学学習と英国社会・文化
 - 大妻中高の英語教員1名が参加
 - 2週間さまざまな授業を17か国の英語教員と集中的に受講。

参加者の感想

「生徒になぜその言語を学ぶ必要があるのかを理解してもらい、生徒がその言語を学びたいくなるような環境を教員が作っていく、そして、生徒のレベルや興味にあった学習方法を提供し、支援することが大切だということ」を、研修を通して繰り返し教えてもらった気がする。教員と生徒の双方向のやり取りが柔軟に続けられることで、初めて学習効果が表れるのだと思う。」

(道城, 2015, p.22)^[5]

初めての試みということで、英語教員が希望し参加した。次年度以降からは、英語以外の科目の教員の派遣を奨励するようにして、持続していきたいと考えている。

英国への派遣は参加者に経済的な負担がかかる。そこでふたつめの企画として、国内での研修を実施した。具体的には、EMI提唱者の一人であるオックスフォード大学教育学部シニア・リサーチ アンド ディベロップメント・フェローである、ジュリー・ディアデン氏の来日に合わせて、本学で大妻中高・大学の教員を対象にEMIの集中講義を開催した。

(2) 本学での EMI 研修プログラム

- 2014年12月6日～12月10日（4日間）
- 15:00～17:30
- 大妻中高及び大学教員が参加



大妻女子大学での EMI 研修プログラム実施風景

参加者の感想

「英語教授法の歴史とともに、英語を教えるとはどういうことなのかを考えさせる授業だった。」

「研修プログラム自体が、EMIの手法で実施され、受講者が自律的に考え、他の参加者との協働作業を通じて、双方向的に意見をやりとりしながら、学修していく研修プログラムとなっていた。」

4. 今後の課題

前節で報告した2つの企画実行を通して、プログラムを受講した教員からは、ファカルティ・デ

イベロップメントの点からも有益であったと概ね好評であった。

ただし、実際にその成果を生かして、英語で授業を行うとなると、既存のカリキュラムとの擦り合わせが不可欠になる。そしてそれらは、時に教員個人のレベルで行えるものではなかったりする。従ってこれらの企画が一過性のイベントで終わらないようにするためには、全体のコンセンサスを得た上で、包括的に取り組む必要があることが認識された。今年度の試みを第一歩とし、今後、この流れが大きくなっていくように、継続して努力を重ねていきたいと考える。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト（K2607）の助成を受けて行った。

参考文献

- [1] Dearden, Julie (2005). *English as a Medium of Instruction – a Growing Global Phenomenon*. British Council.
- [2] 江利川春雄. (2009) 『危機に立つ日本の英語教育』. 慶応大学出版会.
- [3] 寺島隆吉. (2009) 『英語教育が減びるとき – 「英語で授業」のイデオロギー』. 明石書店.
- [4] 今井むつみ. (2010) 『ことばと思考』. 岩波書店.
- [5] 道城貴子. 「研究紀要——大妻中学高等学校」(2015) 「Oxford Teachers' Academy Summer School 2014 研修報告」. p.12-22

(受付日：2018年2月23日，受理日：2018年3月8日)



井上 美沙子 (いのうえ みさこ)

現職：大妻女子大学副学長，大妻女子大学教授

日本女子大学文学部英文科卒。西脇順三郎に師事し日本女子大学大学院修士課程修了。

日本女子大学助手，お茶の水女子大学・早稲田大学等の非常勤講師を経て，大妻女子大学短期大学部教授及び学部長に就任。その間大妻学院評議員，理事を務め，2011年4月より2017年3月まで大妻中学高等学校校長，現職に至る。

主な著書

『ヴィジョンと現実』（中央大学出版部，1997）

『1990年代のイギリス小説』（金星堂，1999）

『ロマン主義の射程』（八潮出版，2001）

『埋もれた風景たちの発見』（中央大学出版部，2002）

『伝統と変革』（中央大学出版部，2010）

主な訳書

『ラフカディオ・ハーン著作集』（恒文社，1987）

『聖書の視座から人間の経験をよむ』（すぐ書房，1998）

『ギフトーエロスの交易』（法政大学出版，2002）

その他

NHK出版ペーパーバック本数冊の注釈

NHKラジオ英会話テキスト「ゲストアワー誌上再録」の注釈（1986～1995）

三省堂や福武書店の辞書執筆